

## 「恋するようにケアをしよう」

### —制度の“正しさ”を越えて、人の暮らしに触れるということ

医療福祉ジャーナリズム分野修士課程 2年 村松恵

#### 「正しいケア」が、人を苦しめることもある

講義を聞きながら、何度も自分自身の看護人生を振り返っていました。看護師として働いていると、「正しさ」は常に求められます。誤嚥させないこと。転倒させないこと。データを整えること。制度を守ること。もちろん、それらはとても大切です。けれど、その“正しさ”が、ときに人の「生きたい暮らし」を追い詰めてしまう瞬間があることも、私たちは現場で知っています。

「もう一度ラーメンを食べたい」

「最期まで家で暮らしたい」

その願いを前にした時、医療者としての“正解”と、人としての“幸せ”がズレることがあります。今回の講義で印象的だったのは、そのズレから逃げず、「対話」で最適解を更新し続ける姿勢でした。制度を壊すのではなく、制度の隙間で、人間の暮らしを守ろうとする。その実践は、福祉というより、もはや“文化活動”なのだと思います。

#### 「自分を責める文化」の中で、私たちは生きている

今回、特に心に残ったのは、先生の「日本は、自分を認める教育を受けてきていない」「自

分を責める文化だ」という言葉でした。私はその言葉に、とても強く共感しました。

日本では、小さい頃から「迷惑をかけないこと」「空気を読むこと」「ちゃんとする事」を教わります。

失敗しないように。

人に合わせるように。

頑張り続けるように。

でも、「あなたはそのままでいい」と言われる機会は、驚くほど少ない。だから私たちは、何かうまくいかないことが起きると、まず「自分が悪い」と考えてしまう。

子育てでも。

介護でも。

医療でも。

教育でも。

「もっと頑張ればよかった」「私の関わり方が悪かったのではないか」「ちゃんとできていない」

そんなふうに、自分を責め続けてしまう。医療的ケア児の親たちも、まさにそうです。

制度に苦しめられていても、「自分の努力不足」として抱え込んでしまう。

現場の看護師や教員も同じです。

構造の問題なのに、“個人の頑張り”で何とかしようとして疲弊していく。

だから先生が語っていた、「失敗する権利」や「主体性」という言葉は、単なる福祉論では

なく、“人間をどう扱うか”という哲学なのだと感じました。

### **デンマークの思想は、「支援」より先に「人」を見ていた**

講義の中で繰り返し語られていた、グルントヴィの「生きた言葉」という考え方。文字やルールではなく、“対話”によって人は育つという思想は、日本の医療福祉の現場に今、最も足りない視点なのではないかと感じました。日本では、「失敗しないように」が先に来ます。でもデンマークでは、「失敗する権利」が尊重される。退院直後にあえてセラピストが介入しないという話も衝撃でした。本人が自分で困り、自分で選び、自分で暮らしを作っていく時間を奪わないためだと。日本の支援は、とても丁寧です。でも時々、“先回りしすぎる優しさ”が、人から主体性を奪ってしまう。その構造は、医療的ケア児の世界にもよく似ています。

「安全のために」

「みんなと違うから」

「前例がないから」

そうやって、大人たちが善意で囲い込んでしまう。今回の講義は、私自身の研究テーマであるインクルーシブ教育とも深く重なりました。

### **「地域を一つの家族にする」という社会実験**

団地の一室から始まった実践が、10年続き、看取り率100%という数字だけでなく、“暮ら

しの風景”として根付いていることにも驚きました。

深夜ラーメンに付き添う。

亡くなる直前まで外食を支える。

血縁ではない高齢者と若者が「祖父と孫」のように暮らす。

普通なら、「リスク」「効率」「制度外」と切り捨てられそうなことを、むしろ地域文化として育てていく。

しかもそれを、“特別な聖人”ではなく、祭りや雑談や格闘技や音楽の延長線上で行っているところに、私は強く惹かれました。

ケアを、「支える側／支えられる側」に分けない。

“共に生きる”を、本気で実装している。

だからこそ、「怪しい」と言われ、炎上もし、それでも続けてきた10年だったのだろうと思います。

### **「恋するようにケアをしよう」という言葉**

講義の最後に残ったのは、技術でも制度論でもなく、この言葉でした。「恋するようにケアをしよう」この言葉には、“相手をコントロールしない”という覚悟がある気がしました。恋は、思い通りになりません。正解ありません。でも、相手を知りたいと思う。理解したいと思う。一緒にいたいと思う。その能動的な関心こそが、ケアの本質なのかもしれません。看護も、教育も、福祉も。

本来は「管理」ではなく、「関係性」の営みだったはず。効率化や制度化が進むほど、  
私たちは“人を見る時間”を失っていく。だからこそ今回の講義は、「ケアとは何か」を、もう  
一度原点から問い直される時間でした。制度を変える前に、まず、自分たちの“まなざし”を  
変えられるか。そして、自分自身を責め続けるのではなく、「自分を認める」ということを、  
私たちは学び直せるのか。そんな問いを、静かに突きつけられた気がしています。

改めまして、貴重なお話を本当にありがとうございました。